京都府立女子専門学校における在校生および教員収集の郷土資料に関する研究

宇田容子*・森　理恵**

A study on Kyoto Prefectural Women's College collection of local materials

YOKO UDA* and RIE MORI**

要　旨：本稿の目的は，京都府立女子専門学校において，1935（昭和10）年から1938（昭和13）年に，在校生と一部の教員により収集された郷土資料について，その詳細と意味とを明らかにすることである。調査の結果，収集資料のほとんどは絵はがきと郷土玩具であり，収集者は全学科の学生102名と国文学の2名の教員であり，採集地は大日本帝国内の各地であることが判明した。これらは当時，同校において目録を作成して整理されている。この収集活動の背景には，郷土玩具の流行と，「国民精神の涵養」に向かう郷土教育の隆盛があると考えられる。

（2005年9月30日受理）

1. はじめに

1）研究の背景と目的

京都府立大学は，京都府立女子専門学校と，京都府立農林専門学校という２つの専門学校を母体として，1949（昭和24）年に「西京大学」の名で発足した。京都府立大学には，前身の一つである，京都府立女子専門学校で収集された郷土資料が現在も残されている。しかしながら，保管されている資料のほとんどが玩具であり，当時，女子専門学校が，女子の最高学府であった事実を考えると，いささか不釣合いなようにも思える。

そこで，本研究では，本学に残された資料をもとに，郷土資料収集の詳細を明らかにするとともに，郷土資料が収集されたと見られる1935（昭和10）年から1938年の女子高等教育のありようと，郷土教育と郷土研究の状況とをあわせて考察し，収集された郷土資料の意味を明らかにすることを目的とする。

なお，京都府立女子専門学校は，京都市右京区桂（現在は西京区）に校舎を持ったことから通称「桂女専」と呼ばれており，以下本論では京都府立女子専門学校を，「桂女専」，また，女子専門学校を「女専」というように，略称を用いる。

2）先行研究

桂女専で行なわれた教育についての研究は，概論としての『京都府立大学百年誌』のほか，個別研究としては，長弘真弓らの「京都府立女子専門学校における裁縫教育の意義」がある。後者は，本研究の対象とした郷土資料と同様に現在まで保管されている裁縫教育関連資料をもとに，同校の裁縫教育について，詳細を明らかにした研究である。

また，本研究と，対象とする時代を同じくした郷土教育の研究に，外池智の「師範学校における郷土教育の実践的展開―茨城県女子師範学校を事例として―」，関戸明子の「戦時中の郷土教育をめぐる制度と実践―群馬県師範学校・女子師範学校の事例を中心に―」などがある。これらは当時，文部省から郷土研究施設費が師範学校に交付されたことから広がった郷土教育についての研究である。当時このような郷土教育は各地の師範学校で行なわれたが，女専で行なわれた郷土教育に関する研究は見られない。

本研究では，当時の女子の最高学府の一つであった女専において，郷土資料が収集されたことに着目して研究を進めたい。

3）研究方法

まず，本学所蔵の郷土資料の調査を行なって詳細を明

*株式会社 西武百貨店
The Seibu Department Stores, Ltd.
**京都府立大学人間環境学部
Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University

らかにするとともに，保管された資料では読み取れない情報を得るため，実際に収集された方々に対するアンケート調査を行なった。

また，当時の女子高等教育や，郷土教育・郷土研究の状況を文献により調べ，本学所蔵の郷土資料についての考察に加えた。

2. 結　　果

京都府立大学に現在も残されている郷土資料とその目録の詳細，さらに収集者へのアンケート結果について述べる。

なお，現存資料と目録は，1962（昭和37）年，京都府立大学の校地が下鴨に統合された際（京都府立大学百年誌編纂委員会1995（以下「百年誌」とする），40）[1]，桂女専の所在地であった桂から，収納されていた棚ごと下鴨に運ばれ[2]，現在に至っている。

残されている資料は現存資料89品目，目録が14点である。

1）目　　録

現存資料は目録の一部，すなわち，収集された資料のごく一部であるため，先に目録について述べる。

残された目録は，『郷土資料目録』としてまとめられたものが1点（写真1,2），その下書きと見られるものが12点，また，「家事科第一学年夏季休暇課題博物標本製作結果」と記されたものが1点ある。

『郷土資料目録』には資料の収集年度，番号，種目番号，品名，個数，採集地，採集者（所属学科及び学年，氏名）が記載されている。種目番号はAからLまでの分類記号と番号が与えられている。記載された項目により，表1～3にまとめた。収集資料のほとんどは絵はがきと郷土玩具であり，収集者は全学科の学生102名と国文学の2名の教員であり，採集地は大日本帝国内の各地である。また，収集年度の記載は昭和10年度から13年度（1935～1938年度）となっている。

目録についてはいつごろ製作されたのか不明だが，記載された用紙に「京都府立女子専門学校」の印があり，1938（昭和13）年から，桂女専が閉校される1951年までに資料の整理が行なわれたと考えられる。

では，目録から，桂女専で収集がどのように行なわれたのかを考察していく。「家事科第一学年夏期休暇課題博物標本製作結果」と，『郷土資料目録』の分類記号I・J・Kの標本類に採集者の一致が見られることから，郷土資料収集の少なくとも一部は，夏期休暇課題として行なわれた可能性が高い。このことは表3の収集地域からも窺うことができる。

表3を見ると収集物は日本全国にわたって集められている。また，当時の日本領であった台湾等の郷土資料も収集されている。後述のアンケート調査の際の送付先やアンケートの回答から，採集者の出身地や旅行先である可能性が高いと推測される。昭和11年度の全校生徒295人は，京都府に住所を有する者またはその家族が154名，その他が141名（百年誌，22）と，およそ半数が京都府以外からの入学生である。

帰省先での収集作業と考えると，資料が近畿地方や中国地方から比較的多く集まっていることも説明がつくのではないだろうか。これらの郷土資料は休暇中に帰省，あるいは旅行をし，その際に収集したものであろう。

また，ある特定の学科の授業でないことは，目録に記載された採集者の所属学科が全学科にわたっていること

写真1　「郷土資料目録」表紙

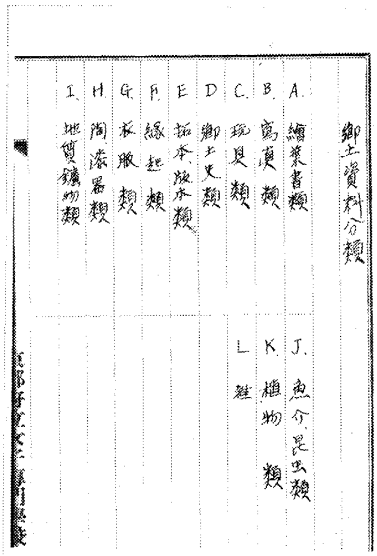

写真2　「郷土資料目録」1ページ

[1] 発足時の校地は分かれて存在しており，文家政学部と女子短期大学部は桂女専の校舎で，京都市右京区桂市ノ前町にあり，農学部は京都市左京区下鴨半木町にあり，大学本部は下鴨におかれた（百年誌，30）。

[2] 奥村萬亀子京都府立大学名誉教授談。

表1　郷土資料の分類とその品目数　（　）は筆者

分類記号	種類	品目数	分類記号	種類	品目数
A	絵はがき類	117	G	衣服類	4
B	写真類	4	H	陶漆器類	5
C	玩具類	96	I	地質鉱物類（標本）	6
D	郷土史類	15	J	魚介・昆虫類（標本）	17
E	拓本・版本類	5	K	植物類（標本）	9
F	縁起類（社寺関連）	7	L	雑（旗・扇・ペン軸等）	5
					計290

表2　収集地域とその品目数

地域	品目数	地域	品目数	地域	品目数	地域	品目数
北海道	2	石川	11	和歌山	9	愛媛	5
秋田	2	福井	7	大阪	2	福岡	6
岩手	1	長野	1	兵庫	27	大分	1
宮城	2	岐阜	2	岡山	18	熊本	13
福島	1	愛知	6	島根	1	鹿児島	4
東京	1	三重	8	広島	7	沖縄	3
千葉	1	滋賀	9	鳥取	11	朝鮮	13
新潟	2	京都	21	香川	22	中国	8
富山	1	奈良	12	徳島	8	台湾	2

表3　採集者の人数

卒業年度	所属学科	人数	卒業年度	所属学科	人数	卒業年度	所属学科	人数
昭和11年（1936）	文	5	昭和13年	文	11	昭和15年	文	7
	家事	0		家事	15		家事	5
	裁縫	3		裁縫	7		裁縫	1
昭和12年	文	8	昭和14年	文	10	昭和16年	文	3
	家事	2		家事	3		家事	2
	裁縫	10		裁縫	3		裁縫	8
							計	102名

からわかる。桂女専は1927（昭和2）年に発足して1951年に閉校されるまでの24年間で計4回の学科の改定（新設・廃止・改称）が行なわれているが，郷土資料の収集が行なわれた1936年からの時期はその第二期にあたる。第二期の1933年からは，理学科の理科が廃止され，それまでの家政科が裁縫科と名称を変え，加えて新たに家事科が設けられた。この時期のカリキュラムを見ると，文科の場合，修身，教育，国語，漢文，歴史，英語，哲学・美学，法制及び経済，自然科学，家事，音楽，体操，裁縫（課外）を履修することになっている。家政科のうち裁縫科は修身，教育，裁縫，家事，理科，国語，英語，法制及び経済，数学，図画，音楽，体操となっている。新設された家事科は修身，教育，家事，裁縫，理科，国語，法制及び経済，数学，音楽，体操となっている（百年誌，22）。もし夏季課題にせよ授業の一環として行なわれていたとすると，どの学科にも共通して履修されていた修身，教育，国語のいずれかということになる。

ただし，収集者が学生数に比べて少人数であることから，クラブ活動など課外活動の可能性もあると考えられる。

2）現存資料

現存資料については表4にまとめた。目録資料の分類Cの玩具を中心に，収集されたものが残されている（写真3, 4参照）。地域に偏りが見られるのは，収集者が一度に数点を提出したためである。なお，目録にもっとも記載の多い「絵はがき」は一点も現存しておらず，おそ

表4　現存資料〔　〕は筆者

採集地	名称	採集地	名称	採集地	名称
北海道	北海道人形	鳥取市	流し雛	大連	支那人形
秋田市	祭の飾り	鳥取市	紙おやま	満州	満州人形
秋田市	八幡人形	鳥取市	要蔵でこ	台湾	台湾地方紅頭嶼
岩手県	南部鉄瓶	鳥取市	黍殻人形	中国？	中国靴
新潟県	情緒人形	鳥取市	麦殻姉様	朝鮮	風俗慢彫人形
金沢市	八幡起上り	鳥取市	内裏雛	朝鮮	朝鮮人形
金沢市	加賀木獅子	米子市	天狗額	朝鮮	枕具（枕ノ両端ニツケルモノ）
金沢市	春駒	米子市	大智明権現	朝鮮	朝鮮木彫人形　玩具福神
金沢市	車鯛	岡山県	御守鈴	朝鮮	朝鮮木彫人形　玩具相氏
金沢市	餌喰鼠	香川県	似顔漫彫土鈴	朝鮮	天下代将軍地下女将軍
金沢市	七福神起上り	香川県	木だるま	朝鮮	朝鮮風俗人形
金沢市	便所夫婦神	香川県琴平町	金毘羅人形（張子）		
金沢市	疱瘡夫婦神	琴平町	一刀彫の女		
金沢市	夜泣上空無僧	愛媛県	めだるま		
愛知県	常滑焼	徳島県	首人形		
岐阜県	山彦通信人形	徳島県	虎張子		
福井県	若狭塗	徳島市	流しびな		
江州長濱	長濱まつり	熊本県	木の葉猿		
京都	大原女人形	熊本県	きじ車	〔未記入〕	玩具　花いかだ
京都伏見	伏見人形	熊本県	相撲人形	〔未記入〕	玩具　白樺人形
京都伏見	伏見人形	熊本県葦北部	おきんぢょ（人形）	〔未記入〕	〔飾り布〕
奈良市	一刀彫雛人形	日奈久		〔未記入〕	〔若衆人形〕
堺市	蒲団太鼓	熊本県葦北部	魚形玩具	〔未記入〕	〔だるま〕
有馬	麦藁細工　虎	日奈久		〔未記入〕	〔猫〕
姫路	張子首振虎	熊本県人吉町	球磨川石人形	〔未記入〕	〔車〕
和歌山市	米つき車	熊本県人吉町	魚形玩具	〔未記入〕	〔猪〕
和歌山市	豆三番叟	熊本市	玩具　虎	〔未記入〕	〔鷹〕
四日市市	入道人形	〔別府〕	〔土鈴〕	〔未記入〕	〔いずめこ〕
四日市市	入道人形御手冨貴	琉球	琉球古典焼（唐獅子）	〔未記入〕	〔すずめ〕
鳥取市	神話人形　八岐の大蛇	琉球	琉球古典焼（蛇三線）	〔未記入〕	〔雪人形〕
鳥取市	面	大連	高粱ペン軸	〔未記入〕	〔人形〕

らくは，別に保管されていたものが，校地移転の際などに廃棄または紛失したものと想像される。

3）アンケート調査

本研究の調査対象である郷土資料は目録と現物資料のみで，目録にも収集の経緯などの記載はなく不明な点が多い。目録に採集者の氏名の記載があることから，実際に収集なさっていた方々から当時の状況を伺うことにした。アンケート調査は以下のように行なった。

・調査目的：目録資料や現物資料からは知り得ない郷土資料収集の経緯や当時の桂女専での生活を明らかにすること。

・調査対象：目録資料に採集者として氏名の記載があった桂女専の1936（昭和11）年から1941年までの卒業生102名のうち，アンケートを送付できた方60名。

・調査時期：2004年11月～12月

・調査方法：郵送により実施。指定した質問に回答し，返送していただいた。

・調査内容：①郷土資料を収集するきっかけ
②郷土資料に関連する指導をしていた先生がいたのか
③収集された郷土資料の活用の有無，されたとしたらその方法
④桂女専での学生生活について自由記述

・回収結果：収集していた御本人からの返送が15通あり，回答率25%であった。

以下，各質問への回答を紹介し，まとめていく。回答者はアルファベット記号で表す。（　）内は筆者。

写真3　郷土資料「北海道人形」

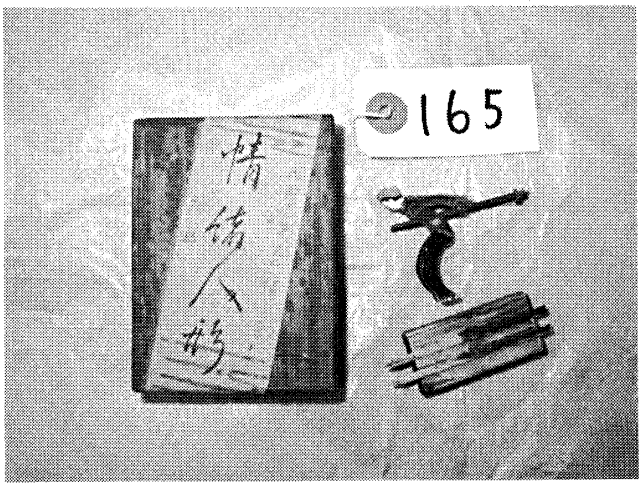

写真4　郷土資料「情緒人形」（新潟県）

3)－1　郷土資料収集の意図

①郷土資料を収集するきっかけを御存知でしょうか。

O.M：授業での記憶はない。
N.H：収集物は生まれ故郷のもの。郷土資料という勉強や集まりはなかった。
K.N：記憶に残っていない。
U.S：収集していたことも忘れていた。
N.M：ぜんぜん知らなかった。（収集物と記載された阿賀神社は）父と2回ほどお参りした。
N.T：収集されたとされる香川県は出身地。授業での研究はなかった。学校内でも郷土資料の研究という話は聞かなかった。
S.T：女専に赴任された先生への記念品に奈良のものを贈ろうということになり，父が後援していた人形師に作ってもらったものを先生が学校に残されたのでは。
T.H：まったく覚えがない。
K.A：まったく記憶にない。
F.T：まったく記憶にない。
N.S：父が単身赴任で九州に行っていたので夏や冬の休みによく博多や別府に行った。旅の記念に絵はがきをだしたのではないか。
H.K：はっきりとは覚えていないが夏のお休みの宿題だったと思う。寺の和尚に「若いのにこんなことを調べているのか，えらいえらい」とほめられたことも覚えている。（収集した金沢玩具は）金沢の郷土玩具店で買い求めたものだった。
H.K：京阪地方以外の方々もいたので，先生からの声がかりがあったと思う。それぞれの地方独自の味を持つ玩具や絵などを持ち寄って提出したのではなかったか。
M.K：（収集した絵はがきの場所は）生地に近いところ。授業の一環ではなかったと思う。有志の行動であったのでは。

②資料に関連する指導をしていた先生を御存知でしょうか。目録には，「荒瀬校長」と「加藤教授」の収集された郷土資料が記載されていました。

N.H：荒瀬校長には俳句を習った。放課後はよく一緒にテニスをした。加藤教授は短歌の先生だった。
K.N：荒瀬先生には国語，加藤先生には古典を習った。
U.S：荒瀬邦介先生で，浄瑠璃の教科書を習った。加藤教授は加藤順三というお名前。
N.M：加藤先生の源氏物語の講義が好きだった。
S.T：荒瀬先生は穏やかで学究の徒だった。
F.T：荒瀬先生には文学史と俳句のことなどを習った。加藤先生は近松の文学について熱を持った講義だった。
H.K：校長先生は俳句が上手で当時はいかめしい感じをうけた。加藤先生には源氏物語の講義をうけた。
M.K：思い出せない。

③集められた郷土資料がどのように活用されたか御存知でしょうか。

U.S：全く知りません。
N.T：そのようなことは存じません。
S.T：知らない。
H.K：はっきり覚えていませんが文化祭のような時にでも並べたのでしょうか。
M.K：思い出せない。

①～③の各質問については，目録の不明な点を補足する意図で質問した。

①の回答からは，収集者の生地，旅行先で収集したものであるという回答が得られた。講義として，直接郷土教育が行なわれたわけではなかったようである。回答より，収集した場所が収集者の出身地である例が多く見受

けられ，夏季，あるいは冬季の課題であったという回答も得ることができた。

②の質問は，目録の採集者の項目に，生徒だけでなく「荒瀬校長」や「加藤教授」と記されていたことから，郷土資料収集を呼びかけた人物の手がかりを得ることを意図した。

郷土資料収集が開始された1935（昭和10）年は，前任の校長が退職し，荒瀬邦介が校長に任ぜられた年であった（百年誌，426）。そのため「荒瀬校長」が生徒に，何らかの郷土に関する呼びかけを行なったのではないかと考えたのである。

アンケートからは，郷土資料の収集を，実際に呼びかけた人物を特定するまでには至らなかった。しかし興味深いのは，「荒瀬校長」も「加藤教授」も，国文学が専門という点である。この点については後述する。

3)－2　当時の学生生活

ここでは学生生活についての自由記述から，郷土資料収集当時の時代背景など，関連が見られるものを取り上げて記す。

④女専時代の思い出で心に残っていることなどなんでもお教えいただけましたら幸いです。

K.H：その頃の女専の生徒は清楚な制服にお化粧などして来る人はなく，まじめで向学心の強い大そう好ましい学風でした。先生方も指導力のある立派な方々にめぐまれ，学生生活はめぐまれたものでした。印象にのこっているのは，内川先生の動物学，猪熊先生の民族学・伝承文化の講義，棚橋先生の建築の講義，広部リウ先生の料理実習，松村先生による青きドナウの合唱練習，毛利先生のタルタルソースなど，古典では更科日記など心にしみて思い出されます。

K.H：金沢から二人入学許可され，私は本校の寄宿舎や桂秀寮などで過ごし大変楽しい思い出がたくさんありました。

A.K：当時家事科はたしか23名（中には韓国，青島から勉強にみえておりました），全国あちこちからのお友達を思い出します。料理の時間にはアルバムの写真によりますと「空也むし，スイートポテト，さんまのムニエル」とあり，当時としてはハイカラでしたでしょう。

T.S：藤村先生（栄養化学）の指導で，「熱上昇に伴う肉蛋白の変化」という論文を書きました。卒論形式のものを書くようになったのは，私たちが最初で，確か，花王石鹸社から出ている雑誌に掲載してくださいました。洋裁の桜井先生も良い先生で，入学早々，この制服が気に入らない人がいますか，と問われ，私一人が手を上げました。上衣がウール地でカーディガン形式なので，これが気に入りません。ボタン止めにしてほしいと言いましたら，これは私のデザインです，改良しましょうとおっしゃってくださいました。

T.F：精神面で滅私奉公というような教えを受けた記憶があります。

N.M：荒瀬先生と傷病兵の慰問に行った時涙をこらえるのに必死で何もお見舞いができなかった。

K.A：戦時色が濃く，あわただしい日々だった。

S.S：戦争の戦火の酷さに大阪に居てのショックでその時代の記憶もふっとんでしまった。戦後の苦労の中，昔のことは思い出したくないような記憶の拒絶反応が頭の中にしみこんでいるのでしょうか。

M.K：あの頃支那事変で毎日のように出征兵士の見送りなどもあり，千人針作りなどもした覚えがある。

印象に残っている授業や，寮生活のことなど記述がある中，戦争に関する記述が目立っていた。これについても，後に考察する。

3. 考　察

本学所蔵の郷土資料について考察するに当たり，まず，その背景として，当時の女子高等教育の状況，郷土教育・郷土研究の状況について述べ，しかる後に，それらを受けて，桂女専における郷土資料収集の意図の考察へと進む。

1）京都府立女子専門学校について

戦前期における高等教育とは，大学，高等学校，高等師範学校および専門学校であるが，その中で女子に制度上認められていたのは，女子高等師範学校と女子専門学校のみである。

このような戦前期の女子高等教育入学者は数がきわめて少なかった。女子高等教育への在学者数を当該年齢人口中の比率で見ると1925年で0.3%，また1935年でも0.6%である（佐々木2002，78）。多くの女性たちは高等女学校へも進学せずに家業に従事し，たとえ進学したとしても，ほとんどの女性が高等女学校卒業と同時に嫁いだ中にあって，高等教育をうけることができた女性はほんの一握りの比較的裕福な層の出身者であった（同，254）。

『桂苑―京都府立女子専門学校創立50周年記念誌―』（桂苑会1978）の中にも卒業生の回想録として，桂女専の当時の進学状況が見て取れる。

私が女専を志願したのは，女専15年卒業の堤先生が，（中略）「嫁入り道具は火事で灰になるが，身につけた学問は死ぬまでついている」との御言葉に刺激され，当時商家では女の高等教育は不要との考えの両親に「嫁入り道具の代わりに…」と毎日懇願，説得し（中

略）入学できました。（1945年卒，153）

とあり，また，本研究で行なったアンケート調査においても当時の状況が綴られている。

私たちの時代には女性が20才以上まで学生でいるのなどおばすてやまだといわれていました（T.H 昭和13年卒）。

女専卒業者は就職するものが少なく，医歯薬系以外の女専については教職が事実上唯一の職業であった。桂女専では教職の道に進むものが多く，昭和8年度での卒業生の状況を見ると学校教員に就職した者が多く，会社員になった者を大きく引き離している（百年誌，22）。

桂女専は，京都府立京都第一高等女学校[3]，第二高等女学校の専攻科を合わせてひとつの専門学校を新設するという提案が行なわれ，1927（昭和2）年3月28日付で設置が認可された（同,15）。認可の条件として文部省は専任校長を置くこと，新校舎建築の予算を計上することの二点を提示したが，校舎の建設は先送りされた。こうして4月1日に，府一高女専攻科の使用してきた教室をそのまま用いるかたちで開校した（同，16）。約半年後，専任校長が任命されるものの校舎の新築については一向に進展がなく，政治的争点とまで化していた。そして1930年には第一回卒業式が挙行され，80人の生徒が独立した校舎を持たないまま卒業した（同，18）。

1931年秋には，昭和恐慌での深刻な日本経済の危機の下，京都府の通常府会に桂女専の新入生募集を翌年度から停止するという予算案が提出され，桂女専は廃校の危機に直面した。この予算案は昭和9（1934）年度限りで桂女専を廃止することを前提としていた（同，18）。

新聞紙上で桂女専の廃校問題が報じられると，当然強い反対論が起こった。桂女専の関係者，父兄，府一高女校友会のみならず，市連合婦人会，婦選獲得同盟京都支部，京都女教員会，奈良女高師同窓会[4]，東京女高師同窓会など各方面から沸き起こっている（佐々木2002，180）。生徒たちもバザーを開いたり，市内の有力者に寄付を募ったり，また，音楽会や映画会を開いてチケット収入を得るなどの廃校阻止運動に積極的に乗り出した（桂苑会1978，46）。結局，新京阪電気鉄道株式会社（現阪急電鉄）から京都市右京区桂（現在は西京区）の土地の寄付の申し出があり，1933（昭和8）年，新校舎へ移転することとなった（百年誌，19）。

[3] 日本で最も早く設立された高等女学校の一つである（佐々木2002，180）。

[4] 後述の郷土玩具収集の例で挙げる「佐保会」である。ちなみに，桂女専の同窓会は「桂苑会」である。

2）郷土教育・郷土研究の状況

2）－1「郷土」の登場

教育の現場で「郷土」が最初に登場したのは初等教育で，郷土的要素が最初に加味された教科は「地理」であった。1890（明治23）年に教育勅語（教育ニ関スル勅語）が発布されると，勅語は道徳教育・国民教育の基本とされ，次第に国家の精神的支柱として重大な役目を果たすこととなる。その翌年制定された小学校校則大綱は，尋常小学校の教科に日本地理を加えるときには「郷土ノ地形方位等児童ノ日常目撃セル事物に就キテ端緒ヲ開キ」とし，ここで初めて「郷土」という言葉が用いられる（関戸ら2003，iii）。しかしながら，郷土地誌や郷土史談を編纂し，それに頼って知識を授けることの弊害を認めたためか，1900（明治33）年の小学校令改正では，尋常小学校の教科から地理と日本歴史がなくなり，郷土教材に関する事項も除外された。そのため各地では独自に郷土誌が編纂され，それをもとに授業が行なわれた。

また，1926（大正15）年に発行された地理学の稲葉晴忠による『地理と地理教育』には

愛国心の養成に資するには地理科に如くものはないとはよく人の口にする所である。（中略）「深く愛す」るには「深く知る」ことが必須条件である。日本国民は日本の国勢を深く理解して初めて愛国心を強めるのである。（稲葉1926，2）

とあり，徐々に愛国心の涵養と地理―郷土教育が結び付けられていく様子が窺える。

2）－2　「郷土」の研究

学術研究のなかでは新渡戸稲造邸で開催された「郷土会」の活動が知られる。新渡戸は1898（明治31）年刊の『農業本論』の中で「地方学」を提唱した。それは「地方」に関する事柄を悉く研究しようとするものであった。こうした新渡戸の考えに共鳴したメンバーが集い1910年から1919年（大正8）頃まで「郷土会」の活動が行なわれた（関戸ら2003，iv）。

この活動と並行して，柳田國男は1913年の創刊から1917年休刊まで雑誌『郷土研究』の編集に携わる。こうして「郷土研究」という言葉が広く使われるようになった（同，iv）。その後，柳田を中心として郷土の研究は，民俗学という独自の学問として確立していく。

また，「郷土」の有形物を対象にした研究としては，柳宗悦を創設者の一人とする「民藝」と，渋沢敬三創設の「アチック・ミューゼアム」を中心とする民具学が知られている。どちらも昭和初期に本格的な活動を開始し，その後，多くの研究者を輩出している。

2）－3　「郷土」の盛り上がりと戦中

さて，1930（昭和5）年より二年間，文部省は師範学

校に「郷土研究施設費」を交付した。その影響については次のようにまとめられている。

一九三〇年，文部省が師範学校に対して郷土研究施設費の交付を始め，尾高豊作・小田内通敏らが郷土教育連盟を設立する。それを契機として「郷土教育運動」が急速に展開し，「郷土教育」や「郷土地理研究」に関連する膨大な著書・論文が生み出された。また，郷土調査，郷土資料の収集展示，郷土読本の編纂などが盛んに行われた。この運動は昭和恐慌期に興隆したため，次第に農山漁村経済更正運動とも結びつき，郷土認識建設運動から，国体観念や日本精神を強調する観念的精神運動へと変質していった（関戸ら2003, v）。

その後，1941年には小学校が国民学校と改められ，皇国の使命の自覚を児童に求めた。「皇国ノ道」そのものを学ぶことが「修身・国語・歴史・地理」の4教科からなる国民科の重要な教科内容となり（井上1940，32），その中の地理の設置においては，国民学校教則案説明要綱第二章第五冒頭に，以下のように目的が述べられている。

国民科地理ハ我ガ国土国勢及諸外国ノ情勢ニツキテソノ大要ヲ会得セシメ国土愛護ノ精神ヲ養ヒ東亞及世界ニ於ケル皇国ノ使命ヲ自覚セシムルコト（井上1940，42）

こうして郷土愛が国土愛として捉えられるよう教育が施されたのである。

2）－4　師範学校での郷土資料収集

文部省による師範学校への施設費の交付によって，全国の師範学校では郷土資料の収集が行なわれた。各地の師範学校が作成した『郷土資料目録実状』を見ると，古文書，書画骨董，標本類など多種多様な物品が集められたが，それらは郷土教育に役立てるというよりも，資料を購入して郷土資料室をつくること自体が目的となっていたところが少なくなかった。その原因としては，施設費の交付が年度末に集中して消化が困難であったことや，施設費の使途が郷土研究資料の収集に限定されていて，実際に師範学校が必要としていた調査費や講習会費として用いることができなかったことなどが挙げられる（伊藤1998，147～151，小畠2003，60～61）。

実際行なわれた収集では，師範学校の郷土資料として，複数の部門において絵はがきが収集された。このことについては和歌山県の師範学校に関する研究があり，そこでは師範学校の多くが絵はがきを「地理（科）」の資料として認識していたこと，師範学校の「地理」では写真を教材として使うことが公に奨励されていたことが述べられている（島津1998，17）。全国の師範学校では，郷土資料の収集には生徒と教師の双方が収集に携わっており，師範学校の当事者（特に教師）は，郷土資料室に備えるべき郷土資料の収集に追われることになったという（同，13）[5]。

3）郷土玩具収集

桂女専で収集された郷土資料の，およそ三分の一は玩具である。以下，郷土資料の収集で玩具が集められたことに関して，当時の郷土玩具の収集と研究の状況について述べる。

3）－1　郷土玩具収集の流行

1930年代に郷土に関する研究が盛んであったことは前述したが，郷土玩具[6]の収集も同様であった。

1920年代より太平洋戦争の頃にかけては，大正デモクラシーの思潮を背景として市民生活と文化の近代化をさらに進展させ，そうした中，実利と縁のない玩具の趣味，研究が豊かな成果を収めた（上笙1999，82）。『大供（おおども）』の創刊を始めとして各地に人形・郷土玩具の雑誌が誕生し，図画録的・由来考証的な人形・郷土玩具文献が簇出し，これらを集大成した『日本郷土玩具』全二冊が1930年刊行された（同，87，斉藤1997，25）。

3）－2　「郷土玩具」研究

収集が流行を見せた郷土玩具の世界であったが，研究

---

[5] その後の郷土教育について付言する。戦後GHQは，軍国主義的教材の削除，修身・国史・地理の授業停止を命じ，教育改革が行なわれた。1947（昭和22）年公布の「学校教育基本法」には小学校教育の目的のひとつに「郷土及び国家の現状と伝統について，正しい理解に導き，進んで国際協調の精神を養うこと」を挙げ，新しく導入された社会科でも郷土に関する学習は大きな位置を占めた（関戸ら2003, vi）。また，1969年改訂の中学校学習指導要領において，「郷土」にかわり「身近な地域」という言葉が登場し，以後現代の教育現場では「地域」という言葉が用いられるようになった。しかし，現在の地域教育と当時の郷土教育には共通する部分が多い（木村1965，伊田1986，佐藤1987参照）。

[6] 『郷土玩具辞典』（斉藤良輔編1997）では郷土玩具を次のように定義する。①材料としては，土・木・竹・紙・布・糸・藁など，明治期以前から日本に存在し，生活の周辺から比較的たやすく，しかも安価に入手できるものが用いられている。②製作は手作りで行われ，各地ごとに民芸的な個性がある。③神社や寺院の縁日，門前市などで売られるものが多い。いずれも悪病，災難除け，招福長寿，豊作安産祈願など，民間信仰に結びついたもの，或いは縁起物的な性格を持っている。中には，神社から授与頒布される護符的色彩がことに強く，いわゆる玩具らしくないものもこれに混じっている。④各地の習俗，生活行事とも結びつきが深い。節供飾り，あるいは土地の祭礼などの年中行事にちなんだものが多く見られ，季節感に富んでいる。⑤時期的にはそのほとんどが江戸時代から，産業革命前の明治期にかけて生まれ，城下町文化などを母体にした郷土色を帯びている（斉藤1997，48）。桂女専で収集された，郷土資料の玩具もこれらの特徴をそなえたものである。

に関してはいささか様相が変わってくる。

1918（大正7）年に京都の郷土趣味社から『郷土趣味』が発行され，巻末の社告によると玩具だけでなく各地の習慣やしきたり，まじない，神仏，信仰，伝説など郷土趣味に関する一般の事を投稿するよう呼びかけている。同誌の1923年1月号から主宰者の田中緑紅（俊次）が「郷土玩具の話」を連載している。「郷土玩具」という語はここで最初に活字になったとされる（斉藤1997，28）。「郷土玩具の話」では，

> （略）現物は蒐集出来てもわからないのはこの玩具の説明である，まして土俗方面から云っても蒐集趣味だけに満足して打ち捨てておく事が出来ない，多少ともこの地方的玩具を通じて其の土地の何物かを調べたいと願った，けれど其の努力は余りに効果が少なすぎる。何なりと其の土地の伝説を持ち歴史を持つべきものが，何等の伝説も歴史も忘れられ且つ顧みられずに今日まで経て来ている（略）こうなって来ると其の玩具の解説は頗る困難である（田中1923，1）。

とあり，そこに郷土玩具研究の困難さが見て取れる。「郷土玩具」という新語は確固とした定義づけや理論から生まれてきたものではなく，これと前後して「大供玩具」「諸国玩具」「地方玩具」「土俗玩具」などとも呼ばれた（斉藤1997，28）。1930（昭和5）年刊行の『日本郷土玩具』のころから「郷土玩具」という語になり，さらに1933年から1935年にかけて有坂与太郎らによって研究趣味誌『郷土玩具』29冊が送り出される前後になると，この種のおもちゃ類を指す語として，「郷土玩具」の名称が単一的に定着してくる（同，35）。しかしその後も「土俗玩具」と「郷土玩具」の違いなどさまざまな混乱を経て「郷土玩具」という新語は定着しながらも体系付けなどは明確にされないまま放置された。斉藤は当時の「郷土玩具研究」について

> あまりにも趣味的な「郷土玩具」という，この矛盾の多い新名称に，採用した彼ら自身が制約されて混迷し，「玩具学」達成の道を前にしてそれもまた挫折に終わった感がある。

とし，郷土玩具研究が趣味的領域から脱皮できなかったことを記している（同，37）。

3）－3　社団法人佐保会の郷土玩具収集

一方，1929（昭和4）年から1936年，奈良女子大学の前身である奈良女子高等師範学校の卒業生組織「社団法人佐保会」で，雛人形や郷土玩具が収集されたことが岩崎によって報告されている（岩崎2001）。

女子高等師範学校については前述したが，この収集の例は学生によるものではなく，同窓会員が佐保会本部からの要請をうけて佐保会に寄贈した例である。落成したばかりの佐保会館に器具什器が不足しているので地方の産物なりを会館設備品として頂きたいといった内容で依頼がされており，各支部で郷土を代表するような人形を寄贈している（同，1）。時代として郷土玩具が選択されたことも興味深いが，その収蔵する人形の内容が桂女専と似通っており，日本全国，中国東北地方，台湾，朝鮮の玩具も収蔵されている。先の，桂女専廃校問題のところで見たように，奈良女高師と桂女専とは人的交流があり，何らかの影響関係も想像される。

4）桂女専における郷土資料収集

4）－1　国民精神・愛国心の涵養

桂女専で郷土資料の収集が行なわれたのは，1935（昭和10）年から1938年までだが，この時代はすでに見たように，郷土教育が「国民精神の涵養」をめざすものになっていった時代であった[7]。この時代に，桂女専で郷土資料が集められたことは，「国民精神の涵養」とは決して無関係なものではないと考えられる。なぜならば，先述のごとく女専の卒業生は教師となる例が多く，教育現場において郷土愛，すなわち国土愛を指導できる教師の養成が意識されたと推測できるからである。

全国の師範学校では「地理」の資料として絵はがきが奨励されていたが，桂女専での郷土資料収集でも，絵はがきが収集の半分を占めている（表1）。教師として教育に携わる上で，その時代的な空気として，「郷土」は避けて通れないものであったといえる。その中で，「教材」としての郷土資料に先んじて触れることによって，「郷土」の思想，言うなれば国土愛，国民精神を教授できるように，指導されていたのではないだろうか。

桂女専の郷土資料の収集者として名前の挙がっていた荒瀬校長，加藤教授はいずれも国文学の教員であった。地理同様に修身，国語教育もまた，愛国心の涵養と密接な関係がある学科であったことはすでに述べた。もしも夏季，冬季の課題で，課外とはいえ授業の一環として行なわれていたとすると，そこには何らかの教育的意味があったはずである。その教育に携わっていたのが国文学の教員であることは，生徒に対して郷土教育を通じて愛国心の涵養を施そうとしたことの，裏付けの一端となるのではないだろうか。

桂女専は女子専門学校であるから当然，師範学校に交付された「郷土研究施設費」の交付はない。しかしながら，行なわれた収集と整理の詳細を見ていくと，絵はがきの多さや分類のしかたなど，師範学校の郷土資料収集と共通点が多い。中等教員無試験検定取扱いの指定を受

---

[7] 伊藤純郎は，「現実の郷土を正しく認識理解することを目的とした」郷土教育運動が，「日本精神涵養の方途」へと変質する画期を1937（昭和12）年としており，桂女専の郷土資料収集はこの画期をまたぐ期間に行なわれたことになる（伊藤1998，413）。

け（百年誌，422），教員養成に力を入れていた桂女専，あるいは，二女高師に次ぐ女子高等教育機関としての自負を持っていた桂女専としては，費用の交付がなくとも，当時隆盛の郷土教育運動に参画したいとの意図が，荒瀬校長を中心に，あったと見るべきであろう。

4)－2　総動員体制へ

そして，忘れてはいけないのが，徐々に戦時色が濃厚となっていく社会の中で，桂女専の生徒たち自身もまた，戦争とは無関係ではいられなかったということである。アンケートの回答からも窺えるように，この時代の桂女専生の学生生活の思い出は，とりもなおさず戦争の思い出と密接に関わっている。

郷土資料収集が行なわれた時代は，国家総動員法公布の直前である。なぜ郷土資料の収集が1938（昭和13）年に終了したのか定かではないが，それを考察し得る興味深いアンケートの自由記述がある。

H.K（昭和16卒）：皇紀2600年にあたるということで，数々の行事があり，学校で記念式典が行われ，また，橿原神宮の造営に奉仕作業を行ったりもしました。国策として，民族意識を高め，盛り上がることが意図されたようです。

収集が終了した1938年には国家総動員法が公布される。この法律によって臨機に勅令または命令を出して，総動員業務を遂行できるようになった。同年，学徒勤労動員がはじまり，桂女専においても同年文部省によって「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」が通達された。その作業内容は各校独自に考案することになっており，桂女専においては桂学区内の六ヶ所の農繁期託児所に出向き，約200人の託児の世話をしている[8]（百年誌，23）。

これをはじめとして，1940年，アンケートにも書かれた，京都御所における紀元2600年式典への参加など，学校行事，あるいは正式な授業として戦争教育が行なわれていった。

例えば，1941年5月28日には，皇后上洛のため，女専生ほぼ全員の350名を含む京都市内の女学校生3万名余りが参加しての旗行列が挙行された。その翌日の『京都日出新聞』朝刊には女専教授や女学生の「感激の言葉」が掲載されている（同，24）。

また，1942年には11月30日から12月30日の一ヶ月間全校生徒が交代で大阪陸軍兵器補給廠祝園部隊（相楽郡川西村）に出向き，勤労作業を行なっている。

1943年から『京都新聞』朝刊で「決戦女学生教育」というシリーズが連載され，その第一回，第二回に桂女専が掲載されている。第一回には避難訓練の様子が，第二回には「空襲下に学ぶ野戦料理　一滴の水も大切に食料も節約」というタイトルで料理の実習の様子が掲載されている（同，24）。また，同年「工場法戦時特例」が出され，今まで女子には不適として禁じられてきた危険な仕事にも従事せしめることとした（片山1984，218）。桂女専では1944年11月1日から理学科第二学年を除いてほぼ全員が女専南にある三菱重工の工場に出勤することとなった（同，25）。翌年には深夜作業も開始されるなど切迫した状況である。

このように，1938年以後は，夏季あるいは冬季の課題による郷土資料収集という，課外としての郷土教育よりも，はるかに強い強制力を持つ別の方法で「国民精神の涵養」がはかられたのである。つまり，国民精神の涵養の一端として，郷土資料収集を行なっていたと考えると，1938年以後は，その必要がなくなったといえ，そのため実施されなくなったのではないかと推測できるのである。

4. おわりに

以上のように，桂女専における郷土資料収集について考察した。本研究では，こうした郷土資料の収集という一つの事象を通じて，戦時下の女子高等教育と，女子学生の学生生活の一断面を捉えることができたのではないかと考える。

謝　辞

本研究にあたってアンケートに御協力いただいた，桂女専卒業生諸姉の皆さま，および，資料についてお教えいただいた本学名誉教授奥村萬亀子先生，郷土教育についてご助言いただいた立命館大学非常勤講師土屋尚子先生に心より感謝の意を表します。

引用・参考文献

伊田稔　「歴教協の研究・実践のあゆみのなかの〝地域〟」『歴史地理教育』第394号　1986→『歴史地理教育実践選集　第33巻　地域の掘りおこしⅠ』新興出版社　1992

伊藤純郎　『郷土教育運動の研究』思文閣出版　1998

稲葉晴忠　『地理と地理教育　日本・上巻』文教書院　1926

井上赳　「国民科に就いて」『文部省国民学校教則案説明要領及解説』日本放送出版協会　1940

岩崎雅美　『社団法人佐保会所蔵　雛人形と郷土人形』奈良女子大学大学院人間文化研究所　2001

岩崎雅美　「社団法人佐保会所蔵　雛人形と郷土人形について」『日本人形玩具学会誌』第13号　2002

[8] この作業を実施した直後に女専では全生徒にその体験と印象とを，事業及びその設備に対するもの，将来に対する希望，体験と反省の3項目に分けて発表させている。それによると生徒たちは託児所を手伝うことを有意義なことと考えていた（百年誌，23）。

小国喜弘　『民俗学運動と学校教育　民俗の発見とその国民化』東京大学出版会　2001
小畠邦江　「昭和初期に記述された郷土と手仕事―山陰の民藝運動と牛の戸窯を事例として」『郷土―表象と実践―』嵯峨野書院　2003
片山清一　『近代日本の女子教育』建帛社　1984
木村博一　「社会科教育と郷土学習」奈良学芸大学教育研究所『研究紀要』第1号　1965→『歴史地理教育実践選集　第33巻　地域の掘りおこしⅠ』新興出版社　1992
京都府立大学百年誌編纂委員会　『京都府立大学百年誌』京都府立大学開学百周年記念事業会　1995
桂苑会　『桂苑―京都府立女子専門学校創立50周年記念誌―』桂苑会　1978
近藤雅樹編　『民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム　大正昭和くらしの博物誌』河出書房新社　2001
斉藤良輔編　『郷土玩具辞典』東京堂出版　1997
佐々木啓子　『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』東京大学出版社　2002
佐藤弘友　「文部省「郷土を愛する心を育てる指導」―その本質と背景」『歴史地理教育』第417号　1987→『歴史地理教育実践選集　第33巻　地域の掘りおこしⅠ』新興出版社　1992
島津俊之　「師範学校による絵はがきの収集と郷土教育―和歌山県の師範学校を例に―」『紀州経済史文化史研究所紀要』第18号　1998
上笙一郎　「日本の〈おもちゃ＝遊び研究〉のあゆみ」『日本人形玩具学会誌』第10号　1999
関戸明子　「戦時中の郷土教育をめぐる制度と実践」『郷土―表象と実践―』嵯峨野書院　2003
外池智　「師範学校における郷土教育の実践的展開―茨城県女子師範学校を事例として―」『筑波社会科研究』第19号　2000
竹中均　「郷土のもの／郷土のこと―民族学・民藝・民具研究」『郷土―表象と実践―』嵯峨野書院　2003
田中緑紅　「郷土玩具の話（1）」『郷土趣味』第4巻第1号　郷土趣味社　1923
長弘真弓・森理恵　「京都府立女子専門学校における裁縫教育の意義」『京都府立大学学術報告人間環境学・農学』第55号　2003
成田龍一　『「故郷」という物語―都市空間の歴史学―』吉川弘文館1998
藤田昌士　「道徳教育の批判と建設」『日本の学力11　道徳と教育』日本標準　1979